

ルイノク (市場)

大原 翔

1年ぶりにモスクワを訪問した。巨大なエネルギーをモスクワには感じる。やはり首都は首都である。全ロシアの富が中央に集中しているのを目で見て、心で感じるができる。今年、サッカーの世界カップの試合がロシアの各地であり、各都市が整備された。特にモスクワはそれが顕著である。都心の道路や歩道が美しく整備されており、欧州の大都市にも劣らぬというより、超えているのではなかろうか。欧米の対露制裁や何のそのという印象である。

モスクワの中心の道を歩いても、以前は、あまり東京や大阪の雑踏というような感じはしなかった。しかし、今日歩いてみて、大都会の雑踏を感じさせてくれた。歩く人の数が増えているのか、あるいは、歩くスピードが速くなったのか。商店が急増しているためかもしれない。ネオンサインも増えたものだ。年末に近づき人々の心が急いでいるのかもしれない。

そんな気分の中で知人の紹介で行った市の南部の「ルイノク」(市場)は衝撃的であった。ソ連時代などという昔のことで恐縮ながら、市内にいくつかルイノクがあった。これは個人で栽培した野菜や果物、あるいは肉などを国営商店とは別ルートで販売するバザールである。値段



も交渉次第で、中央アジアなどからきた人が主に販売していた。当時は、食物などが不足がちで、ルイノクは商品流通の補助的な役割も果たしていたと言えよう。ロシアになってからも食物や日用雑貨品などが販売されてきた。そんなルイノクの一つの「ウサチョフスキー」というルイノクに行った。ルイノクそのものは、昔からあったものらしい。今は、しゃれた外観で若者を狙った感じの市場に様変わりである。(写真) 中に入ると、これまた、昔とは隔世の感があり。現代感覚のセンスの良いデザインの店やカフェ、レストランがならぶ。そしてそこに群がる若者の多いこと多いこと。当然、彼らのファッションのセンスも最高である。

若者が狭いスペースの中で、ピザやクロワッサンなどを粋な感じで食べている。寿司や焼き鳥のカウンターもある。思わず焼き鳥を食べ、別のカウンターで握り寿司をほおぼる。ビールは、まあ一たまには、良いかと、日本製のを注文してしまった。モスクワに和食店と呼ばれるものは1000軒を超えるともいわれるが、このカウンターは安価で魚も新鮮であった。

日々のロシアとの仕事でストレスを感じ、ロシアとのかかわりは、正直なところ、もういいと時には思ったりする。しかし、モスクワの発展や変容のダイナミズムに直接触れると強い刺激を受け、また近いうちに来なくてはとってしまう。ロシアは魔物なのかも知れない。